

**■「私から始まる平和統一大賞」とは**

　朝鮮戦争によって分断された朝鮮半島と在日コリアン。先人たちが夢にまで見た「統一」はいつ来るのでしょうか？　最近の国家情勢で考えると問題があまりにも大きく見えて、何から手を付けて良いのか、わからなくなってしまうことはありませんか。しかし、皆さんが「心の壁」を乗り越えた小さな体験が、何かしら在日同胞の和合に役に立った事はなかったでしょうか？

　’為に生きる’神様主義の真の愛を根本精神として国籍と思想、組織を超越して、国内外の韓民族の和合と統一の実現を目指す平和統一聯合は、この度、皆様の「心の壁」を乗り越えた経験を、同世代や後に続いていく世代の力とするために、創設20周年記念企画としてこの賞を創設いたしました。

| 名称 | 「私から始まる平和統一大賞」青年スピーチ部門、会員及び一般部門　エッセイ募集 |
| --- | --- |
| 募集テーマ | 「私の心の壁を越えて始まった平和統一の経験」・自分の置かれている環境でぶつかった「心の壁」、なぜそれが「壁」であったか、どのようにして乗り越えたか、そのきっかけや周りからの言葉、勉強になったと思う自分の経験、そしてそれが在日同胞の和合、朝鮮半島の平和統一にどのように発展していく可能性があるかをスピーチ、または記述。 |
| 応募条件 | 平和統一聯合に所属している会員、担当者。または左記から紹介を受けた方。 |
| 募集期間 | 青年スピーチ部門：2024年６月16日（日）まで地方予選会員及び一般部門　エッセイ募集：2024年４月１日（月）～2024年６月17日（月） |
| スピーチ原稿規程 | 【青年スピーチ部門】　５分以上７分以内（制限時間を超過した場合は減点）。※パワーポイント使用可。【会員及び一般部門　エッセイ募集】800字以上3000字以内、１人１点。※両部門とも主となる言語を日本語で行うこと。部分的に韓国・朝鮮語、または他国の言語を使用しても良いが、日本語の意味を付け加えること。 |
| 応募方法 | Wordファイルのまま、応募フォームよりご応募ください。※ 青年スピーチ部門に応募の方も、同様に原稿を提出してください。 郵送、FAXでのご応募はご遠慮いただいております。 |
| 発表 | 2024年6月下旬　ホームページにて公開入賞者には、メールまたはお電話にて直接ご連絡をさしあげます。青年スピーチ部門の大賞受賞者は、７月４日東京都内の記念行事でスピーチします。その交通費は本部負担。 |

**題名：結婚によって広がる心の世界**

**お名前：　秋月 盛雄**

(下記より本文をご記入ください)

「結婚が人生を変える」

　この言葉は良い意味でも悪い意味でも一般的に使われる言葉かもしれないが、私自身も、この『結婚』で人生が変わった人間であることは認めざるを得ない。

　私たちの結婚で変わっていること――ただしこれは今は特別変わったことでもないのかもしれないが――それは「国際結婚」であるということである。国際結婚の実はやっかいなところが、相手、私にとっては「妻」であるが、その言動が個性によるものなのか？あるいはその国やその国の文化・風習などによって影響を受けた言動であるのか？が実にわかりにくい、ということである。

　何を隠そう、私はこのことに多く手を焼いてきたことをこの場を借りて告白したい。妻の言動が単なる「個性」であれば、結婚生活がうまく続かなかった人たちから聞くことが多い「性格が合わなかった」という言い訳もできよう。ただし、国際結婚の場合はそうはいかない。なぜなら、妻の言動は「妻の国」においては、あまりにも一般的な言動だったりもするからだ。

　説明が遅くなってしまったが、私の妻は「韓国人」である。見た目はほぼ日本人と変わらない。意外とこの「外見がほぼ変わらない」ということも、実はやっかいなことの一つかもしれない（笑）。韓国人は、食べる時に立て膝をつき、茶碗やお椀を手で抱えることはせず、家族のような近い間柄ではあまり挨拶もしない。家の外は汚くてもいいが、家の中は徹底的にきれいにする。つまり、あらゆることが「日本人と反対」なのだ。先ほども書いたように、外見はほぼ日本人と変わらないのに、である。

　いつからそういう発想が出てくるようになったか詳しく覚えていないが、おそらく、妻との間で小さい喧嘩を積み重ねながら、このままでは結婚生活も明るくないという危機感が芽生え始めてからのことだと思う。目の前の妻を愛し続けるためには、妻の育った国やその文化をよく知らなければならないと思うようになり、いつしか「妻」と「妻が育った韓国」とを分離して考えることが少なくなった。つまり、妻の言動を通して韓国がわかり、韓国を見ていけば妻の言動もさらにわかる、ということを実感し始めたわけだ。

　さらに自分でも驚きなことがある。それは、妻の父親、私にとっての義理のお父さんは、私たちが結婚する少し前に持病で亡くられたのだが、その義理のお父さんの故郷が現在の北朝鮮の寧辺（ヨンピョン）という地域であり、妻も一度は自分のお父さんの故郷である北朝鮮を訪ねたいと時々口にする。ニュースでたまに耳にするこの北朝鮮の寧辺という地域は、「核施設」がある場所としてしか報道されないが、本来は「美しいツツジの花が咲き乱れる場所」として知られていたそうだ。このように、私の妻は北朝鮮が自分のお父さんの故郷でもあるので、「38度線以北」に情が流れるのだが、実は妻の世代――私たち夫婦は1970年代前半生まれであるが――この世代の平均値よりは「韓国と北朝鮮は本来一つの国である」「韓国と北朝鮮は統一されなければならない」という意識が強い方なのだと聞く。つまり、私の妻の世代や、さらには世代が下がるにつれ、「韓国と北朝鮮は統一される必要がない」と考える人たちが多くなっているわけだ。そのような中にあっても、妻の影響を受けた私にとっては、不思議と北朝鮮という国が、多くの日本人が感じるような単なる「恐ろしい国」にはなり切らない。

　少しずつではあるが、こうした妻の影響もあり、日韓関係が完全には良くならない『遠因』について少し気づいたことがある。それは、韓国、北朝鮮のどちらの人々にとっても同じ思いだろうが、日本という国に対し「わが民族を2つに分断してしまった国」という恨みが根底にあるのだと。そして、この恨みを解かない限りは、これまでもそうであったように、日韓関係はある一定の距離から縮まることはない、という結末にならざるを得ないのだろう。

　繰り返しになるが、私の人生はすでに「結婚によって変わってしまった人生」なのだと思っている（笑）。正直、国際結婚でなかったら、多くの日本人が考えるように、北朝鮮は単に「赤の他人の国」であり、日本にとっての「恐ろしくて迷惑な国」でしかなかっただろう。

　韓国人と結婚した者として、そして「韓半島に民族分断をもたらした国」に生まれた者として、私の残された人生の中で何ができるのか？これからは、そのテーマとしっかり向き合い続けたいと思っている。